

Title	ヨゼフ小説と未来： トーマス・マンにおけるカール・グスタフ・ユングおよびエルンスト・ブロッホ受容をめぐって
Sub Title	Josephsroman und Zukunft. Thomas Manns Rezeption von Carl Gustav Jung und Ernst Bloch
Author	松本, 要(Matsumoto, Kaname)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.162(285)- 174(273)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨゼフ小説と未来

トーマス・マンにおけるカール・グ
スタフ・ユングおよびエルンスト・
ブロッホ受容をめぐる

松 本 要

1905年頃から文通でもって親交をはじめたといわれるフロイトとユングが10年たたずして袂を分ったのは、周知のことに属する。ユングはフロイトの『夢判断』に深い感銘を受け、同書が無意識にはじめて扉を開いた画期的労作として高く評価した。しかし実を言えば、夢や性欲や宗教や超心理現象などに関する両者の見解には最初から大きな隔たりが横たわっていたのも事実である。たとえばフロイトは、夢を外界との関係において抑圧された願望と解するのに対し、ユングはその著『夢の本質について』において、夢の中に無意識の意識に対する「補償」(Kompensation)の作用を認めている。⁽¹⁾意識主体の生き方やその方向性が妥当である場合には、夢はそうした働きに同調し、さらにはそれを促進する形で現われるが、反対に意識が一面的に偏ったり、誤りを犯したり、逸脱した方向に向かっているときには、夢はそれとは逆の様相を呈し、意識の機能を修正する作用を表出するというのである。ユングは、このような意識のあり方を診断したり⁽²⁾(diagnostizieren)、未来において起りうる出来事を予言する⁽³⁾(prophezeien)夢の超心理的性質を指摘している。⁽³⁾トーマス・マンの晩年の大作であるヨゼフ4部作の主人公であるヨゼフは、父親ヤコブゆずりの夢見癖の持ち主であって、かれの告白する夢の中にヤコブから長子権と祝福を授かることを先取りした内容が含まれている点が、かれの兄弟たちの反発と怒りを買う原因となる。大麦の穫り入れの際に見た夢——夢の中でヨゼフは兄弟たちの真中に立っていたが、みんなの穂束がヨゼフの穂束にお辞儀を

したという夢⁽⁴⁾や太陽と月と11の星がヨゼフに敬意を表したという夢などがそれである。ヨゼフの夢想性や予知能力は、後にエジプト王ファラオの夢を解いて王から厚い信頼を勝ち得るきっかけとなるのであるが、二度にわたって「穴」に落されたときも、それが単なる悲しい事件を意味するものではなく、アドニス＝タムツ＝オシリス神話の図式にのって「受苦者となり、犠牲になり、引き裂かれた神になる」⁽⁶⁾ためのプロセスであることをヨゼフに予感させるのが、この予知能力である。ユングは、夢を因果律的視点からとらえ、環境的条件に還元しようと試みたフロイトとは逆に、人間の心の奥底に潜む先天的条件に結びつけて、いうなれば目的論的視点に立って解釈しようとした。ユングは『自我と無意識の関係』において次のように述べている、「夢に出てくるイメージや思考連関は、われわれが意識的な意図をいだいて生み出したものではない。それらはすべて、自発的に発生したものであり、われわれが手を加えたわけではない。いわば恣意性に左右されない心的活動を表わしている。それゆえ夢は、もともと高度に客観的な所産であり、いってみれば心の自然的所産なのである。したがって、夢から少なくとも、心の営みのある種の基本傾向に対する示唆やほのめかしを期待してもさしつかえない。さて、心的な生命現象は——他の生命現象と同じく——単に因果的な経過だけではなく、未来志向的な、合目的な事象である」⁽⁷⁾と。夢という「心的な生命現象」が「単に因果的な経過だけではなく、未来志向的な、合目的な事象である」という問題提起は、間接的なフロイト批判も意味している。もっとも上記の引用文を注意深く読むと、なるほどユングは、「夢に出てくるイメージや思考連関」が「自発的に発生したもの」であることを是認しているけれども、反面それが人間の魂の「示唆やほのめかし」の域を越えた内容を必ずしも意味していないことを慎重に断っている。『心理学と錬金術』におけるユングの分析に従えば、「夢は、これを理解するには余りにも乏しい暗示しか与えてくれないので、われわれは連想による材料や類似の材料によってこの暗示を拡充し、理解可能なものになるまで鮮明化しなければならない」⁽⁸⁾。そしてその方法が、錬金術の根本的諸表象の色々なアナロジーを組合わせ

て作り上げる、心理学用語でいう「増幅法」(amplificatio)であるとユングは言う。⁽⁹⁾ かってヨゼフは、同じ母から生まれた弟ベンヤミンに一羽の鷲が羊の群の中から自分を天上へ連れ去る夢を見ことを語ったことがある。ヨゼフの落された「穴」は、ユングのいわゆる「夢に出てくるイメージや思考連関」の観点に立てば、羊の群の中から冥府をくぐり抜けて鷲の飛び交う天上へ向かうための入口、別な言い方をすれば、錬金術的化体と昇華を生じさせるヘルメスの密閉空間であろう。前出の『心理学と錬金術』によると、ヘルメスの容器とは、「天球に似せて、ぜひとも球形でなくてはならない。錬金作業を成功させるためには星辰の力を借りなくてはならない」とある。ヨゼフには幼い頃から自分の生活を神的なものに適合させる傾向があって、「穴」の中にあっても、この地上の事象は星辰の中に書き込まれている範例や対照がないと全然生起できないし、またそうした範例も地上での実現が実証されない限り存在したことにはならないという確固とした確信を持つにいたる。ヨゼフのこの確信は、ヨゼフ4部作の基本構造を予示しているといえよう。この小説が「過去という泉は深い。その底は、ほとんど測り知れないといってよからう」という書き出しではじまっているように、われわれが一度無限の過去の中に入るや、その世界が神秘性を帯びるのは、語り手によると、「その本質が直線的でなく、球体的であるという事実に基づいている」⁽¹²⁾と言う。二つの半球の補填と相互対応から成り立っている球体が一度廻転すると、二つの半球は、「上は同時に下であり、また反対に地上で起るほどのものはすべて天上でも繰り返され、天のことはまた地にも現われるといったふうに相対応しつつ全体に纏められている」⁽¹³⁾という結論に達していく。ヨゼフにおける天上的なものと地上的なものの観念連合は、この球体の理念と軌を一つにしている。このような球体の理念を基軸にして、旧約聖書、占星術、古代エジプト史、宗教学、精神分析学などのモチーフを重ね合わせて膨らませながら、時空を越えてこの作品を拡大し、深化させる小説技法は、ユングが夢や神話や錬金術を解き明かす際に用いた「増幅法」を彷彿とさせる。

ところで、冒頭で触れた無意識の「補償」機能をユングが提起したとい

うことは、言いかえれば、かれが無意識の自律性を認めていたということ
を意味している。無意識は、必ずしも意識と対立関係にあるのではなく、
まして敵対的な存在でもない。むしろユングは、意識は系統発生的に二義
的と考える。そしてユングは、フロイトが名づけた「エス」を個人的無意
識 (das persönliche Unbewußte) と呼び、個人の幼年期の記憶領域を越え
た本源的な魂の領域として集合的無意識 (das kollektive Unbewußte) を
設定する。⁽¹⁴⁾ ユングは言う、「無意識は、個人的なもののみならず、非個人的
なもの、受け継がれた諸カテゴリーという形での集合的なもの、ないしは
元型 (Archetyp) を含んでいるとわれわれはたぶん仮定しないわけにはい
かないのではあるまいか。それゆえわたしは、無意識はいわばそのより深
い層に、比較的に生命力を持った集合的な内容を有しているという仮説を
立てた。つまりわたしが言っているのは、集合的無意識ということであ
る」⁽¹⁵⁾ (傍点はユング) と。つまり「集合的無意識」とは、人類がその生誕
以来、幾億幾千億の人間によって漸次に、総合的に体得した無意識の深層
構造である。マンは講演論文『フロイトと未来』で、人類が特殊に、個別
的に、客観的に繰りひろげるかのように見える実人生は、すべていにしえ
に、神話にその「原規範、原形式」が見出されていると解釈している。⁽¹⁶⁾ フ
ロイト自身の言葉にならって言えば、「人類の発達的全段階をなんらかの
形で短縮して反復する」⁽¹⁷⁾ ということであろう。けれども、引き裂かれなが
ら甦る生をわが身のうちに起こらせ、「一般にはただ深淵からひそかに生
を規定し、生を形成するもの、すなわち無意識を相手として祝祭的な芝居
を演じる」⁽¹⁸⁾ のがヨゼフだとすれば、ここでマンのいう「無意識」をフロイ
トの「エス」とそのまま等質とみなすことにいささか疑問を感じないわけ
にはいかない。なるほど自然科学・医学・精神療法が「人類史的なものに
対する、宗教および道徳の起源に対する」⁽¹⁹⁾ 研究領域にまで立ち入らない
と、真の人格の解明はありえないと世界に訴え続けたのはフロイトであっ
たであろうし、「光と闇、上なる世界と下なる世界をわかたず深淵」の上に優
美な橋をかける仲介者の役目を果たしたのがフロイトであったことも否定
はできない。⁽²⁰⁾ にもかかわらず、マンが1942年11月17日ワシントンの国会図

書館講堂でおこなった講演「ヨゼフ小説The Josephs Novels」で、「わたしは、神話的集合からの自我の誕生、アブラハムの自我の誕生を物語った」⁽²¹⁾というとき、この「神話的集合」は、むしろユングのいわゆる「集合的無意識」の別名ではないかと思いたくなるほどである。湯浅泰雄『ユングとキリスト教』は、ユングが神話学者カール・ケレニーと協力して出版した共著『神話学入門』(Einführung in das Wesen der Mythologie)を引き合いに出し、この著で取り上げられている神話形成の二つの基本的要因、「神話素」(Mythlogem)と「生の様式」(Bios)に注目する。⁽²²⁾湯浅によれば、「神話素」が「すべての時代と地域において、人間の夢や空想や幻想の中で一致した性質を示す特殊な主題や図像学的結合」を示しているのに対して、「生の様式」は、「時代と地域の個性的文化的条件によって規定された世界観や生活習俗のタイプ」を指しているという。⁽²³⁾ケレニーの言うこの「神話素」こそが、ユングの『夢の本質について』の言い回しにならえば、「集合的無意識」領域における表象形式——「元型」——にほかならない。この「神話素」が個人の成長発展をはかる環境というものに先立つ先天的条件であるとするならば、「生の様式」は、個人的無意識領域に内蔵され、形成されていく後天的条件を意味していよう。別の箇所でも触れたことだが、この作品を前半・後半に大別することを許していただくならば、「ヤコブ物語」にはじまってヨゼフが兄弟たちに「穴」に落されるまでの前半が、湯浅の言う「すべての時代と地域において、人間の夢や空想や幻想の中で一致した性質を示す特殊な主題や図像学的結合」をテーマにしており、古代エジプトという「時代と地域の個性的文化的条件によって規定された世界観や生活習俗」が展開するのが、ヨゼフがエジプトの宰相に登りつめて親兄弟と再会を果たすまでの後半部分と考えられる。⁽²⁴⁾マンは、ヨゼフがエジプトに入ってから、そのヨゼフを「開かれた同一性」⁽²⁵⁾を原理とする神話的集合体から少しずつ、さりげなく、目立たないように引き離し、ユングの説く「個体化の道」⁽²⁶⁾(der Weg der Individuation)を歩ませる。そして意識と無意識が互いに補い合って向かうべき「本来的自己」⁽²⁷⁾に近づけていく。ヨゼフは、出世につれて、世間の眼に神格化すればするほ

ど、かれにとってますます人間的となり、「みなさん、わたしがそれです、わたしは、あなたたちのヨゼフです（Ja, ja, ich bin's. Ich bin Joseph, euer Bruder⁽²⁸⁾）」と名のりるとき、それは、かれが「集合的無意識」領域の無数の「Ich」から、「Ich」のくりひろげる神話的遊戯から歩み出て、神話的遊戯の地上における成就を自ら告げたことを言い表わしている。「神話素」と「生の様式」の結合が、魂の先天的条件と後天的条件の綜合がヨゼフの「個体化の道」を経て実現されたのである。球体の理念とは、言いかえれば、このようなことを意味しているのである。



ところでマンは、ユングの深層心理学からさまざまヒントを得、それらをヨゼフ小説の血とさせ肉とさせながら、なぜことさらユングを自分から遠ざけ、批判し続けたのであろうか。マンは1935年3月16日付けの日記で、「ユングは、ナチズムとその《神経症》の賛美のために思考し、語っている。ユングはせっぱ詰まって信念と時代のために適合させた——高水準での——一例である⁽²⁹⁾」と批難し、晩年のマンと親交を続けたエルンスト・ブロッホも『この時代の遺産』の中で、ユングは「あまりにも啓蒙されすぎた魔法の解除を飛び越えて、芸術的な空想の、宗教的な神話の正当性を、いや正確にはそうしたものの不当性を探し求める。かれは、夢の世界の《奪うことのできない》原初的価値としての無意識的なものの中に探し求める⁽³⁰⁾」と批判の矢を放っている。マンフレッド・ディールクスは、それにもかかわらずユングがユダヤの心理学者追放に一役を買った「精神療法医師会」の会長を1933年から（1940年まで）つとめていたことをマン自ら知りながら、1936年の講演論文『フロイトと未来』で、慎重にはあるが、ユングの深層心理学を評価したのは、マンのフロイトに対する侮蔑にあたるのみならず、マンがユングの「神経症」の魅惑に抗しきれないでいたことの証左になると指摘している⁽³¹⁾。ディールクスは、それを実証する一例として上記の1935年3月16日付けの日記を挙げている⁽³²⁾。ディールクスは、この日記の具体的な箇所については触れていないのであるが、かれが

念頭に置いていた箇所としては、「神経症もまた積極的なものであり、魂の貴重な一部であるという事実、患者は神経症からいかに逃れるか、ではなく、神経症をいかに担うかを学ばなくてはならないという事実、このような事実を見逃すのは《魂のない合理主義》のみだとユングが表明しているのは、——正しい⁽³³⁾」というマンの日記の一節が考えられる。マンのこの告白は、生を規定し、創造するのがけっして合理主義や主知主義ではなく、『近代精神史におけるフロイトの位置』の表現に従えば、「夜のように暗黒のもの、神聖で根源的なもの、生命を孕んでいるが前意識的なもの⁽³⁴⁾」であるという若い頃のロマン主義的思考が晩年にいたっても依然として根付いていたことを裏付ける。その点で注目すべきは、上記の日記の後半部である。マンは言っている、「《魂のない合理主義》に対する侮蔑が否定的な作用を及ぼすのはもっぱら、全力を挙げて制動用蒸気を与えなければならない瞬間がとっくに来ているのに、この侮蔑が合理主義に敵対する全速前進を意味しているからである⁽³⁵⁾」と。政権を奪取したナチに対して「制動用蒸気を与えなければならない瞬間」が訪れているのに、「魂のない合理主義」を侮蔑するようなユングの態度が、マンの目には「合理主義に敵対する」ナチの「全速前進」を促す役目を果たしたという風に映っていたのであろう。ユングは、等質のディレンマを内部に孕むマン自身を映す鏡のような存在であったのであろう。マンが表向きユングを遠ざける必然性が、マンの内部にはあったのである。

ヘルマン・クルツケは、ユングの場合におけるように、神話は「満たされない⁽³⁶⁾現在」に対するアヘン剤のような存在ではなく、社会主義革命の出現を予示する曙光のような存在でなくてはならないという意味のことを説き、ユングの思想はヨゼフ小説において色々と応用されたけれども、つまるところユングはマンにとって、ユング心理学でいう「ペルソナ⁽³⁷⁾」(persona)——外界の客体との関係に即して形成される自我の働きの集合的な仮面の役を演じたにすぎず、ヨゼフ小説のテーマは、ブロッホの『この時代の遺産』の『《始源の無意識》にいたる道はすべて、その一步一步がまた、人間の中に潜んでいて人間の歴史の中でまだ未成のままであった事柄

についてのまだ意識されていないもの（das noch nicht Bewußte）にいたる被覆された道である」⁽³⁸⁾（傍点はブロッホ）という一文に集約されているとの解説をしている。⁽³⁹⁾マンが社会主義の思想を重ね合わせた形でブロッホのユートピア学を受容したかどうかについては疑問を感じる。マンが亡命中終始亡命文学者たちの革命的言辞と一線を画していた姿勢が、そのことを物語っている。マンがブロッホから受容したものは、イデオロギーという限定的な視点ではなく、人間の生き方を示す総合的な世界観であったと思う。マンとブロッホは、1937年から1940年にわたって実はひそかに手紙を交わしている。これらの手紙のうちマンから差し出したものはかれの手元に残ってないのだが、ブロッホが差し出した書簡は残っている。日付けは、1937年8月22日、1939年1月7日、同年2月7日、1940年5月27日、同年6月7日、同年6月23日、同年7月25日である。⁽⁴⁰⁾ディールクスは、先程引用したのとは別の論文において今度はこれら7通の手紙のうち6通を取り上げ、中でも1940年6月23日付けの手紙で、ブロッホがヨゼフ小説を「神話の機能転換（Umfunktionierung）をかつてないほどに人に納得させる、もっとも幸運な一例である」と賞讃している点に注意を喚起するように求めている。⁽⁴¹⁾マン自身も、あるアメリカ人宛ての手紙の中で、神話をファンタジムの手から取り返し、人間的なものに〈機能転換〉することがこの作品の基調をなしていると語っている。⁽⁴²⁾ブロッホはマン宛ての同年7月25日付けの手紙において、この「神話の機能転換」というモチーフを解く鍵としてAnagnorisis（発見）という概念を用意する。⁽⁴³⁾この言葉は、もともとアリストテレスが『詩学』の中で、Peripetie（急転）とKatastrophe（破局）と並んで劇的行為の急転開のもう一つの形式、つまり思いがけなく敵が味方かがわかる認識の場として考案した、ドラマを構成する三つのモメントの一つであった。ディールクスは、このAnagnorisisという語にドイツ語のWiedererkennenをあてはめるが、⁽⁴⁴⁾むしろブロッホは、かつて存在したものをそのまま思い出し、再認識する意味でこの語をとらえてはいまい。なぜならブロッホのユートピア思想は、既存のものの想起（Anamnesis）に基づいたプラトンの認識に対する拒否から出発しているからである。⁽⁴⁵⁾

ディールクスが分析しているように、マンとブロッホが書簡を通して交わした会話のテーマが「Wiederkehr」（回帰）と「Progression」（前進）であった⁽⁴⁶⁾ということは、十分に推察される。しかしブロッホがいにしえの世界へ回帰するのは、「徼の生えた元型」と「ユートピア的に真に清算されていない元型」⁽⁴⁷⁾を区別するためであった。ブロッホは、この「ユートピア的に真に清算されていない元型」が口を極めて批判し続けたユングの「集合的無意識」の領域に内蔵されている可能性を『この時代の遺産』で次のように示唆している、「反動的な精神医学がフロイトの単なる個人的無意識と反目させて漁夫の利を得ている集合的・先史的無意識そのものの中にこそ——予想もつかぬような無意味さや迷信とならんで——ひとつのまだ高らかな声を発していないものが被覆されている⁽⁴⁸⁾」と。ブロッホは、こうした見解を踏まえ、『希望の原理』において「すべての元型が古代の体験の圧縮像というわけではなく、たえずそこから若枝が生え出て、現存する元型の内容を増やしていく。このような場合は、まず古代の元型や歴史的に新しい元型の中へとユートピアへの浸透が、つまり元型の中に包み込まれている希望を解放する機能転換がおこなわれる⁽⁴⁹⁾」（傍点はブロッホ）と結論づけている。この「機能転換」は、ヨゼフ小説の結末部において見事に具象化されている。ヨゼフが「みなさん、それがわたしです」と名のりするとき、弟のベンヤミンは、思わずわれを忘れ、若い頃の神話的な夢がかなえられ兄が本当にメタトロンに任ぜられて栄光の座にあると思ひ込むのであるが、ヨゼフは、微笑しながらそれを拒絶して兄弟たちに次のように言う。

「あなたたちの弟は、神の戦士でもなければ、宗教的な救いをもたらす使者でもなくて、人々を養う経済家にすぎないのです。そしてわたしがあなたたちにおしゃべりしたあの夢の中であなたたちの穂東がわたしの穂東に頭をさげたり、星が腰をかかめたりしたことは、とてつもない大きな意味のことではなくて、ただわたしが人々の身体のために善行を施すことに対して父やあなたたち兄弟から礼を言われるだろう、という意味にすぎなかったのです⁽⁵⁰⁾」

このような神話図式からのユーモラスな逸脱は、ヨゼフの生存をヤコブに知らせる際にも繰り返される。死んだと思い込んでいるヨゼフが生きていたことを知ってヤコブが驚愕しないように配慮し、アセルの娘で音楽の才のあるセラが引き裂かれた者の復活の歌をツィターの伴奏で唱って聞かせる。ヨゼフがかつてアドニスの森でベンヤミンに唱って聞かせたタムツ神話の神聖で真面目な歌が、ここでは陽気なへぼ詩人の歌という庶民的な形で姿を現わすのである。「このユーモアは、比類なきほどに深遠なもので、本来のものとそれに対する非本来のものとの間にある非整合的な形態を微笑みながら認識するという点こそ、このユーモアの本質にはほかならない」とケーテ・ハムブルガーは指摘する。⁽⁵¹⁾ この「本来のなもの」に対する——すなわち神話の伝統的図式に対する最大の修正は、アブラハム一族の継承者の地位に就くことを意味する祝福が読者の予想に反して性欲地獄に陥っている悩めるユダに授けられることによってピークに達する。ヤコブは、再会したヨゼフに「神はお前を与え、そして奪った。そしてまた戻したが、完全に元どおりのお前というわけではない。……神はお前を高め、同時に罰したのだ」と心情を吐露する。ヤコブのこうした認識は、もはや「神の戦士」でも「宗教的な救いをもたらす使者」でもなく、「人々を養う経済家にすぎない」というヨゼフの自己認識と表裏一体の関係にある。ヤコブは、自分の感情にだけかまけてわがまま勝手に人を選び好みするばかりか、そのような感情を傲然と心に抱く癖があった。ヤコブが伯父ラバンの屋敷で25年もの長い歳月にわたって働かされたこと、結婚初夜の床に見出したのが最愛のラケルではなく、その姉のレアであったこと、レアには沢山の子供が授けられたのに、ラケルが長年不妊のままで苦しんだこと、あるいはラケルが早死したこと——これらの事実はいずれも、マンによってヤコブの「神の模範の地上における模倣」⁽⁵³⁾に対する罰の現われと解釈されている。さらにハムブルガーは、ヨゼフが2度にわたって「穴」に落されたのもタムツ的な死のシンボルではなく、ヨゼフの高慢とヤコブのヨゼフへの偏愛に対する叱責のシンボルであるとの見解に立っている。⁽⁵⁴⁾ ヤコブがヨゼフに長子権を与えなかったこと、そしてヨゼフが祝福を辞退

したのは、神話を利用して精神を踏みにじったナチと自分を対置させようとした作者マンの意図を反映させていようが、それ以上に神の叡智への畏怖の念、マン流に言えば、「神への配慮」⁽⁵⁵⁾を反映させていると筆者は考える。いささか逆説めくが、いにしえの世界に潜むハムブルガーのいわゆる「非本来的なもの」の中にこそ人間が未来に向かって問うべき「本来的なもの」が隠されているかもしれないのだ。ブロッホの言う「元型の中に包み込まれている希望を解放する機能転換」とは、そういうことである。「かつて」という既知の世界に降りていったはずのヨゼフが「いま」において未知のものを、「まだ意識されないもの」を、ユングの夢という形を借りることもなく、意識の表出によって「いつか」に対して先取りするという神話的発想には、存在論に根ざしたブロッホ哲学のユートピア機能が投影されていると思えてならないのである。この小論は、『希望の原理』の次のような一節を引用して結びとしたい。

「ユートピア機能は、文化的余剰をおのがものとして発見するばかりでなく、それはまた二重の意味を有した元型の深みからおのれ自身の構成要素を、つまり先史時代に眠っていたまだ意識されないもの、まだ成就されないものの先取りを取り戻す。弁証法的な元型そのものを使って言えば、
ここの深淵へ沈んでいく錨は、同時に希望の錨なのである」⁽⁵⁶⁾

註

- (1) Carl Gustav Jung : Gesammelte Werke, (abgekürzt : JGW.)Bd. VⅢ (Vom Wesen des Traumes), Olten und Freiburg im Breisgau, Walter-Verlag. 1976, S. 327.
- (2) ibid. , S. 320.
- (3) ibid. , S. 314.
- (4) Thomas Mann : Gesammelte Werke (abgekürzt : GW.) Bd. IV (Joseph und seine Brüderl), Frankfurt, S. Fischer Verlag. 1974 S. 508.
- (5) ibid. , S. 519.
- (6) ibid. , S. 583.
- (7) JGW. VⅡ (Zwei Schriften über Analytische Psychologie), S. 144.
- (8) JGW. XⅡ (Psychologie und Alchemie), S. 333f.

- (9) ibid. , S. 333.
- (10) ibid. , S. 275f
- (11) Joseph und seine Brüder1, S. 9.
- (12) ibid. , S. 189.
- (13) ibid. , S. 190.
- (14) Zwei Schriften über Analytische Psychologie, S. 139ff. 特に S. 147-151.
- (15) ibid. , S. 151.
- (16) GW. K(Freud und die Zukunft), S. 493.
- (17) Sigmund Freud:Gesammelte Werke, Bd. XI:Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. Frankfurt, S. Fischer Verlag. 1969, S. 203.
- (18) Freud und die Zukunft. S. 498.
- (19) ibid. , S. 493.
- (20) 仲介の役目の問題についてはErich Heller : Thomas Mann Der ironische Deutsche, Fankfurt, Suhrkamp Verlag. 1959, S. 269f.が詳しい。
- (21) GW XI (Joseph und seine Brüder), S. 665.この講演のドイツ語原文は、1945年に雑誌「Deutsche Blätter」に掲載された。
- (22) 湯浅泰雄：「ユングとキリスト教」、人文書院、1986、58頁。
- (23) 上掲書：同頁。
- (24) 「神話学と深層心理学の隠された一致点——トーマス・マンとカール・グスタフ・ユングをめぐる——」、日本独文学会中国四国支部編『ドイツ文学論集』第24号、1991、40-48頁参照。
- (25) Joseph und seine Brüder 1, S. 128.
- (26) Zwei Schriften über Analytische Psychologie, S. 191.
- (27) ibid. , S. 191.
- (28) GW. V (Joseph und seine Brüder 2), S. 1686.
- (29) Thomas Mann : Tagebücher 1935-1936 hrsg. von Peter de Mendelssohn, Frankfurt, S. Fischer Verlag. 1978, S. 57.
- (30) Ernst Bloch : Gesamtausgabe(abgekürzt : BG.), Bd. 4(Erbschaft dieser Zeit Erweiterte Ausgabe), Frankfurt, Suhrkamp Verlag. 1962, S. 345.
- (31) Manfred Dierks:Thomas Mann und die Mythologie in:Thomas Mann Handbuch hrsg. von Helmut Koopmann, Stuttgart, Alfred Kröner Verlag. 1990. S. 298.
- (32) ibid. , S. 298.
- (33) Thomas Mann : Tagebücher 1935-1936 S.56f.
- (34) GW. X(Die Stellung Freuds in der modernen Geistesgeschichte), S. 261.
- (35) Thomas Mann : Tagebücher 1935-1936 S. 57.
- (36) Hermann Kurzke : Thomas Mann Epochewerk-Wirkung, München, C. H.

Beck Verlag. 1985, S. 251. Kurzkeのこの用語は、ブロッホが『この時代の遺産』でユングを評した際に用いた言葉である (Erbschaft dieser Zeit, S. 347.)。

- (37) Zwei Schriften über Analytische Psychologie, S. 311f.
- (38) Erbschaft dieser Zeit, S. 348f.
- (39) Kurzkeの前掲書S. 251.
- (40) Ernst Bloch Briefe Bd. 2 1903-1975, Frankfurt, Suhrkamp Verlag. 1985, S.692-709.
- (41) Manfred Dierks:Thomas-Mann-StudienII, Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann, Bern, Francke Verlag. S. 260.
- (42) “Der Briefe an Harry Slochower, 19. Juni 1942” Thomas Mann Briefe 1937-1947, hrsg. von Erika Mann, Frankfurt, S. Fischer Verlag. S. 262.
- (43) Ernst Bloch Briefe Bd.2, S. 707.
- (44) Dierksの前掲書S. 260.
- (45) BG. Bd. 5(Das Prinzip Hoffnung), S. 158.
- (46) Dierksの前掲書S. 260.
- (47) Das Prinzip Hoffnung, S. 185.
- (48) Erbschaft dieser Zeit, S. 349.
- (49) Das Prinzip Hoffnung, S. 187.
- (50) Joseph und seine Brüder 2, S. 1686f.
- (51) Käte Hamburger : Der Humor bei Thomas Mann zum Joseph-Roman, München, Nymphenburger Verlag. 1965, S. 147.
- (52) Joseph und seine Brüder 2, S. 1744.
- (53) Joseph und seine Brüder 1, S. 319.
- (54) Hamburgerの前掲書S. 158.
- (55) Joseph und seine Brüder, S. 648.
- (56) Das Prinzip Hoffnung, S. 187.